

令和7年3月28日

軽井沢町議会
議長 遠山 隆雄 様

新渡戸文化小学校 対話勉強会 研修報告書

軽井沢町議会議員 小山 裕嗣

日程：

令和7年3月8日（土）13時～17時

場所：新渡戸文化学園 シアタールーム

内容：

- ・新渡戸文化小学校 西田教諭、茂木教諭による対話勉強会
- ・ドキュメンタリー映画映画「小学校～それは小さな社会」鑑賞した上での考察
- ・映画に出演していた榎本教諭によるトークセッション

対話の時間より：

映画「小学校～それは小さな社会」は、教員たちの葛藤、感情の揺れ動きがリアルで、最初
は違和感ある言動の先生も、本音の部分が垣間見える瞬間に人間的でホッとしたり、感情の
ふり幅が実に大きい映画だった。ありのままのオールロケを許可した世田谷区教育委員会、
教員、地域、保護者の方々への敬意の念が相次いだ。

<映画自体>

- ・コロナ禍で翻弄された2021年から1年間を撮影
- ・子どもたちと教員たちの日々の暮らしを描いている
- ・予見できないコロナ禍での一斉休校、緊急事態宣言発出で林間学校中止等、教員の奮闘ぶ
りや、翻弄される子どもたちの苦悩が赤裸々に描かれている
- ・一つの考えに誘導しがちなナレーションが全編を通してない

鑑賞後の受け取り方は様々で、既に SNS でも賛否両論が巻き起こっている。「違和感だら
け」「旧態依然とした指導法にゾットした」などのコメント等が散見される。また鑑賞後の
オンライン対話会等も方々で開催されているようだ。

映画の反対意見の多くの声として、学校の教育システムや教員たちからの指導に関する疑問が多いようだ。無論、日本の教育には多くの課題が山積していることは確かだ。ただ初めから学校批判、教師批判を見ると、私自身とてつもない違和感を覚えてしまう。そして人は、なぜ頭ごなしに否定、批判、非難してしまうのだろうか、という問いも生まれている。

果たしてそこにはいったい、どのような感情が渦巻いているのだろうか、とも。

本作品を撮影した、山崎エマ監督のインタビュー記事で下記のコメントが目に残った

「今は多様性や個人を重んじるがあまり「集団生活」や「団体行動」という言葉を使うだけで、ニュートラルではなくなっている感じがします。もちろん、一歩間違えれば同調圧力にもなりますし、集団にハマりにくい人たちが生きづらさを感じていることもわかります。ただ、悪いところは良いところと切り分けて課題として向き合うべきで、日本式の教育のすべてを否定してしまうと、何か大切なことも見逃してしまうのではないかとも思います。人間はいろんな人がいるコミュニティの中で、自分の居場所や役割、生きがいを見つけて暮らしていく社会的生物。日本の小学校はそうしたコミュニティで生きていくための練習の場なんです。今の日本社会に当たり前にある、日本人が気づいていない良いところに気づいて自信を持ってほしい」

考察：

いつかどこかのタイミングでこの映画を鑑賞した人たちと対話してみたいという想いが沸いていた矢先、新渡戸文化小学校の教員の方々が主催する対話勉強会が開かれた。また映画の中でも印象に残っていた教員の方も参加しての対話の場となった。

会場に到着すると、参加者は私以外、全員現職教員の方々ばかり。それぞれ色々な想いや感情をもって参加されているということが、始まる前の雰囲気から伝わってきた。結果から言えば、映画の中で登場されていた現役教員の方の当事者としての想い、そして映画では見えていない前後のドラマや想い等、まさに現場で丁寧に関係性を作りながら、奮闘されているお話を聞いたことは、有意義かつ豊かな時間だった。

この対話イベントの秀逸だった点は、まずもって参加者に前提となるグラドルールを明確に打ち出していた点だ。

・映画を観た方

- ・これからの教育や学校について、共に考えて行こうという思いのある方

・正解を言おうとしたり、言葉で叩いたり、論破しない方

いろいろな声がありますが、何よりも当事者をリスペクトし、一緒に対話する姿勢が必要だというのが、今回の場をつくるに至った想いです。

<対話の根底には相手へのリスペクトが大切>

賛否両論を生む映画というのは、まさに対話に繋がる可能性、価値がある作品と思っていたので、グラドルールを大切にしながら、それぞれ感じていたことを共有し、わかち合う。まさに対話とはこのように醸成されていくのではないかと実感した。一にも二にも、この会があまりに秀逸で、新渡戸文化小学校の茂木先生、西田先生に心からの敬意と感謝を示したい。

これからの学校や教育でどんな場を作っていっていいんだろう、という視点での建設的な意見やアイデアは、今後の在り方を模索する上で、ありとあらゆる点において示唆に富んでいたし、大いに参考になった。今回の映画に限らず、一部分を切り取って、重箱の隅を突くような否定批判が散見される今日、丁寧な対話と思考の場こそ、大人が真っ先にやらねばならないのだと痛感する。当町においては、学びの多様化学校を開設するにあたり、現場や当事者の声に寄り添った丁寧な対話を形成することを切望したい。

<感情の学びを実践中>

新渡戸文化学園小学校の先生方のファシリテーションがあまりに素晴らしかったので、どんな実践を繰り返していただけるのだろうと伺ってみると、ぶれずに子どもたちと僕たち大人（教師・保護者）が共に幸せをつくっていくという実現のために、SEL、感情の学びを1年間続けてこられたとのこと。

場づくりの前提から、アイスブレイク、表出から表現、リフレクションのサイクルが抜群だった。年度の終わりには、サークル対話で子どもたちの変容が見られたという。心が震えるほど嬉しい体験だったと先生は仰っているが、やはり継続的かつ段階的な学びを形成する大切を改めて認識した。

<最後に>

違和感からの対話で大切にしたいこと

「すべてを否定しまうと、何か大切なことも見逃してしまうのではないかと」

山崎監督のこの言葉が琴線に触れた。沢山の課題はありつつも、この映画を通して、少なくとも聖人君子に仕立て上げられがちな、教員たちも一人の人間なのだ、と捉えることが出来

るのではなからうか。懸命にもがきながらも前へ進もうとする姿にいつしか映画に没入していたのかもしれない。これからの日本の教育で大切にしていくことは何か、また変わっていくべきかの議論をする上でのたたき台にもなる映画ではないか、と感じている。ファシリテーションについては、当町においても積極的に学びを強化すべきであるし、議会の中でも大いに参考とすべき場づくりであった。